

小学校第6学年 国語科学習指導案

日時 平成16年11月12日(金)5校時
児童 北上市立江釣子小学校 6年1組
男子18名 女子16名 計34名
指導者 教諭 松本 洋介

- 1 単元名 言葉と文化について考えよう (光村図書)
教材名 外来語と日本文化(説明文)
現代を生きる五音、七音(説明文)
「言葉と文化」展示館へ、ようこそ

2 単元について

(1) 児童観

このクラスの児童は2学期のはじめの単元「話し合って考えを深め、意見文にまとめよう」において、片仮名の言葉の使用をめぐって、自分はどうか考える際、多方面から資料を収集し、各自の意見を支える調べ活動を行ってきた。その時の児童の様子は、自分が用意した資料を調べたり、家族から話を聞いたり、またはインターネットで調べたりと、非常に意欲的に取り組んでいた。この活動は、「『言葉と文化』展示館へ、ようこそ」での資料収集の際に生きてくると期待ができる。また、できあがった意見文を読んでも、普段何気なく話したり、書いたりしている片仮名の言葉の使用について、時と場合を選んで使い分けていくべきだと、片仮名の言葉の使用について意識化が見られる児童が多数いた。言葉に対する興味・関心が湧いてきているこのクラスの児童にとって、本単元「言葉と文化について考えよう」を学習することは、片仮名の言葉の使用という枠を越え、今、自分が何気なく使っている言葉、自分を取り巻く言葉が、実は長い歴史を通り抜け、多くの国々、人々との文物の交流の産物としてあるという、いわば「文化」という抽象的なテーマについてまで、見方や考え方の幅を広げるきっかけになると期待している。

また、1学期の単元「筆者の考えと事実を読み取ろう」では、『火星に生命をさぐる』という教材文において、文末表現の違いなどに着目して、事例として挙げられていることと、筆者の考えとに分けて読み取り、筆者が伝えようとしたこと(要旨)をとらえる学習をしている。この学習において児童は、事実や事例を示す文と筆者の考えを表す文を押さえながら読みすすめる、要旨をとらえることができた。本単元では前単元をふまえ、要旨をとらえることを通して要約する(筆者の伝えたいことを押さえて、簡潔な文章にまとめる)力をつけさせたいと考える。

(2) 教材観

この単元では、一次と二次で学習したことを結びつけ、理解したことを三次で表現に生かしていくという構成にする。

一次の「外来語と日本文化」の内容は、室町時代や江戸時代に入ってきた外来語が、話題の中心である。2学期のはじめの単元「話し合って考えを深め、意見文にまとめよう」において、児童は片仮名の使用について調べ、議論してきた。片仮名を含め言葉そのものに興味を持ち始めた児童にとって、今この教材を学習することは非常に好機と考える。「文化」というテーマまで見方や考え方の幅を広げたり、さらには言葉についての考察を深めさせていきたい。また、この教材は、課題提示文に対して、カルタ・カルテ・カードの3つの事例がいつ、どのように取り入れられたか分かりやすく示されており、さらに、課題の答えにあたる文がすぐ後の段落に用意されている。そして結びに筆者の結論の文が書かれているため、児童に要約する力をつけさせるのに適していると考えられる。

二次の「現代を生きる五音、七音」は、俳句と短歌の学習にもなっているが、これが目的ではなく、五音と七音を基調として表現されることの多い日本の伝統的表現法に触れることで、日本の言語文化の一面に触れることを目的としている。一次では外国との文化の交流を切り口にして「言葉」というものを考え、この二次では、日本の伝統的な表現方法としての「言葉」を学習する。さらに、一次で得た要約する力を二次の説明文でも生かしていきたい。この説明文は短く、筆者の言いたいことも簡潔に述べられているため、要約する力をつけるのに適していると考えられる。

三次の「『言葉と文化』展示館へようこそ」は、一次、二次の学習を受け、児童自身の手で言葉を集めたり、調べたり、作品を作ったりし、児童自ら言葉と文化のかかわりの様子を実感するのに適している教材である。ここでの活動は、一次、二次の学習で身につけた力をもとに調べた内容や、活動の内容を要約していきながら、自分たちが表現する展示物の作成にあたらせたい。

(3) 指導観

2学期のはじめの単元「話し合って考えを深め、意見文にまとめよう」の学習で、片仮名の言葉の使用をめぐって、自分はどうか考える際、時と場合を選んで使い分けていくべきだと、言葉の使用について意識化が見られる児童が多数いた。このことをふまえ一次においては導入にあたって、外来語を無理矢理日本語に直した例文を示し、不自然さに気づかせるとともに、生活の中に外来語が多く使われていることに気づかせたい。さらに、本単元の「読むこと」の目標と

して「言葉と文化について考える目的で文章を読み、内容を的確に押さえながら要旨をとらえ、要約する。」を設定する。要旨をとらえるためには、まず、書かれている内容を的確に読みとることが必要である。その際には、『火星に生命をさぐる』で学習したことを想起させ、文末表現に着目したり、文章構成をとらえたりしながら学習を進めたい。さらに、調べたことが分かりやすくまとめられるような形式のワークシートを作成し、活用させる。

二次では、さまざまな五音、七音を繰り返し声に出して楽しみながら、リズムの軽快さや心地よさなどを味わわせたい。そしてこのリズムの軽快さや心地よさが日本の伝統的な表現方法であることを体感させたい。読む際には、リズムの軽快さや心地よさが感じられるようにタンバリン・カスタネット・小太鼓などの小道具や、メロディーをつけたり輪唱ふうにしたりと読みの形なども工夫したい。また、要約する際には、一次同様、文末表現に着目させ、大事な部分とそうでない部分を見分けさせながら活動させる。

三次は、一次、二次で学習したことを深化拡充させる教材として位置づけたい。前の二つの教材で学習したことをふまえて、自分で課題を設定し、調べたり、集めたり、作品にしたりして展示館を開く。その際に「自分たちが学習したことをふまえて、さらに知りたいこと、疑問に思ったことを紹介する」という目的意識、「5年生に向けて紹介する」という相手意識をはっきりさせたい。そうすることによって児童がより活動を具体化することができると思う。留意点としては、どんな形で発表する場合でもなぜその課題を選んだのかを見る人聞く人に伝えるようにするというのを常に意識させる。また、調べた内容や、活動の内容について要約したものを取り入れて発表できるようにさせたい。

3 単元の目標

【関心・意欲・態度】

- ・言葉と文化について関心を持ち、意欲を持って文章を読もうとしたり、自分が調べたことを表現しようとしていたりしている。

【話すこと・聞くこと】

- ・自分が調べたことや、分かったことなどが聞き手に伝わるように話すことができる。
- ・話し手がもっとも伝えたいことを聞き取ることができる。

【書くこと】

- ・調べたことの中から必要なことやら資料を選び、整理することができる。
- ・調査した内容を効果的に表現するために、発表の方法を工夫してまとめることができる。

【読むこと】

- ・言葉と文化について考える目的で文章を読み、内容を的確に押さえながら要旨をとらえ、要約することができる。
- ・書かれている内容について、事例と感想、意見の関係を押さえ、言葉と文化について自分の考えを持ちながら読むことができる。

【言語事項】

- ・語感・言葉の使い方などに関心を持つことができる。
- ・文語に親しむことができる。
- ・言葉についての由来や歴史、特質などについて関心を持つことができる。

4 単元の指導計画と評価規準（全12時間）

次	時	指導目標	関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語
1	1	内容に興味を持ち、単元の見通しを立てることができる。	内容に興味を持ち、進んで単元全体の見通しを立てようとしている。				
	2	教材文から投げかけの部分を見つけ、課題提示の文を作ることができる。				指示語の部分に具体的な言葉を補いながら自分なりの課題提示文を作っている。	
	3 (本時)	カルタ、カルテ、カードの3つの事例を押さえ、さらに外来語全般の伝わり方を押さえ、課題提示に対する答えの文章を作ることができる。				キーワードや文末表現に着目しながら課題に対する答えを探している。	

	4	外来語は文化の交流の証であることが分かり、文章全体を要約することができる。				筆者の考えを意識して、まとめている。	言葉についての由来や歴史、特質などについて関心を持っている。
2	1	教材文を声に出して読んで、リズムを楽しむことができる。 文章全体を要約することができる。				筆者の考えを意識して、まとめている。	語感・言葉の使い方に興味を持っている。 文語に親しんでいる。
3	1	展示館を開くことについて理解し、自分の課題を設定することができる。	主旨を理解し、意欲を持って展示館を開こうとしている。				
	2	課題解決のために資料を収集し、整理することができる。 視点をはっきりさせながら、効果的な表現を工夫することができる。			調べたことの中から必要なことがらや資料を選び、整理している。 調査した内容を効果的に表現するために、発表の方法を工夫している。		言葉についての由来や歴史、特質などについて理解を深めている。
	3						
	4	できているところまでを発表し合い助言し合うことができる。		発表をする観点、聞く観点をはっきりさせて発表したり、聞いたりにしている。			
	5	中間発表での評価をもとに付加修正を行い、完成させることができる。			アドバイスをもとに、調査した内容を効果的に表現するために、発表の方法を工夫している。		言葉についての由来や歴史、特質などについて理解を深めている。
	6						
	7	五年生に向けて展示館を開催することができる。	進んで自分たちが調べたことを発表しようとしている。	発表を見る観点、聞く観点をはっきりさせて発表したり、聞いたりにしている。			

5 本時の指導

(1) 目標

- ・カルタ、カルテ、カード3つの事例を押さえ、課題提示文に対する答えの文章を作ることができる。

(2) 本時の評価の観点と具体の評価規準

具体的評価規準	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する児童への手だて
評価の観点			
読むこと	・外来語全般が伝わる条件などをふまえて答えの文章を作っている。	・3つの言葉がどうして日本語に入ってきたとたんに、意味が狭くなったのかを押さえた上で、諸外国と日本との交わりの違いが反映していることを押さえて答えの文章を作っている。	・「カルタ」の事例は6段落に、「カルテ」「カード」の事例は8段落に書かれていることを押さえさせる。 ・「つまり」以降の文章でどこが大事なのか押さえさせる。

(3) 展開

段階	学 習 活 動	支 援 () と 評 価 (*)
導 入 8分	1 前時までの確認をする。 2 本時の課題をとらえる。 課題に対する答えを3つの事例をお さえながらまとめよう。	筆者が問いかけていることをワークシートを振り 返りながら確認し、音読する。 今日の学習は、前時の筆者の問いかけに対する答 えを探し、まとめる学習であることを確かめる。
展 開 27分	3 答えになりそうな部分の見当をつ ける。 4 3つの事例について読み取る。 5 課題提示文に対する答えの文章を を作る。	P33、L2の「いつ」「どのようにして」を手 がかりにして探していけそうだということを確認 める。 「カルタは」「カルテは」「カードは」という言葉 を手がかりにまとめていけばよいことをとらえさ せる。 「いつごろ」「どこから」「どんなものと一緒に」 という観点でワークシートに整理してみるよう指 示する。 カルタ・カルテ・カードそれぞれの事例について ワークシートに書き込む。その際カルタの事例に ついては一斉授業で確かめて、どのように探して いけばよいか分からせたい。カルテについては自 力で書き込ませる。カードについては読み取りが 難しいと思われるので、教師と一緒に確かめる。 カルテの事例を見つけられない児童には、カルテ が医者を使う厚紙を指す言葉として取り入れられ た訳がどこに書いているか探すようにドバイスす る。 課題に対する答えの文章は9段落にあることを確 かめた上で、自力で書くように指示する。課題に 対する答えの文章を作ることができない児童には、 「つまり」以降のどの文章が大切かを考えさせる。 * 3つの事例を押さえながら課題提示に対する答え を見つけることができたか。 (ワークシート、発言)
終 末 10分	6 課題に対する答えをまとめる。 7 次時の学習について知る。	個人作業してきたものをみんなで発表し合ってま とめていく。 課題提示文を読んでから答えの文を読むという形 で発表し、全体として自然に流れているか確かめ る。 次時は、文章全体を要約していくことを知らせる。

(4) 板書計画

(課)

課題に対する答えを三つの事例をおさながら
まとめる。

カード カルタ カルテ

課題提示文

どうしてカードカルタカルテと三つの言葉は、もともとは字を記す厚手の紙を指す同じ言葉だったのに、日本に入ってきたとたんにとわも意味がせまくなり別々のちがう言葉のちがうになったのであるのか。

同じ言葉

日本

何があつたのだらう…

カルタ カルタ カード

意味がせまくなつてしまつた。

	いじころ	どこから	意味がせまくなつた訳
カルタ	室町時 代の終わ りころ	ポルトガルから	西洋人が何か数と模様をかいた厚紙で楽しそつに遊ぶのが心に強く残つたから。
カルテ	江戸時 代の末	ドイツから	医学は主としてドイツから長所を学ぼうとしたから。
カード	江戸時 代の末	イギリスアメリカから (英語)	いちばん広く深く交つたから。 意味も割合にそのまま使われている。

(答え)

それはこれらの言葉をもちいた国々と日本との交わりのちがいが反映してゐるからである。

6 授業を支える活動

(1) 教室掲示

- ア 新出漢字の掲示 短冊にして掲示する。
- イ 意味調べ語句の掲示 短冊にして掲示する。
- ウ 外来語の例の掲示 世界地図をもとにして書き込ませる。
- エ 指示語の掲示 指示語の種類、性質をまとめたものを掲示する。

(2) 内容把握のために

- ア ノートに全文を視写させる。
- イ 意味調べ、興味を持った語句の解説をさせる。
- ウ 指示語をチェックさせる。 どこにかかるのか、どこを受けているのか矢印を引かせる。
- エ 筆者の考えの文章に線を引く。